

<生活科における学ぶ喜びについて>

子どもたちの姿から、遊びの中から下記のようなことが、学び喜びではないかと考えた。

①自分なりの思いや願いをもち、心や体をほぐして対象に自らかかわることができる。

(生活への関心・意欲・態度)

②自分なりの考えで関わったり、工夫したりして、表現することができる。

(活動や体験についての思考・表現)

③活動を通して、知的な気付きがある。

④必然的に生まれる身近な人や社会、自然とのかかわりを通して、自他のよさに気付くことができる。

(身近な環境や自分についての気付き)

<支援、評価について>

「支援」というのは、「ささえ助けること。援助すること」(広辞苑より)である。しかし、授業の中で教師は、子どもたちに「～のようになって欲しい」「～のような力をつけたい」という願いが強く、思わず教師自身の思いを押しつけてしまうかのような教師の出をして、子ども自身の思いや考えを奪ってしまうことがある。そこで、今回は、遊びの授業の中で、子ども自身の思いや考えを生かせるように、「見守る支援」と「子どもの活動のきっかけとなる支援」を大切に考えた。

(見守る支援)

さりげなく子どもたちの様子をみたり、一緒にそこで教師が遊んだりしながら、子どもの思いを大切にすることを心がけた。教師は始め、そんなかかわり方で良いのか不安があった。しかしこのようなスタンスで学習を繰り返すことで、子ども姿がどんどん変わってきた。「自分なりの動きをする子ども」、「どんどん活動を友だちと共に作っていく子ども」等、自主的な姿が見られるようになってきた。そして、「先生～していい」という言葉も、すごく減っていった。

(子どもの活動のきっかけとなる支援)

子どもの活動が停滞して、なかなか活動に深まりが感じられないことがある。そんなとき、「～してみよう」といった新たな活動を紹介するのではなく、今回は、道具や材料を紹介する等をして、子ども自身が活動を深めたいようなきっかけとなる支援を心がけた。本時でも、道具によって、活動が一気に変わり、その後、どんどん自分で活動をつくっていく姿が見られた。

4 来年度への課題

- (1) 子どもたちが地域のよさを感じながらかかわりを深めていくことができる地域素材の開発。
- (2) 子どもたちの学ぶ喜びをより高めていくことができる支援のあり方。
- (3) 子どもたちの具体的な姿から、評価の視点を明確にしていくこと。